

コロナ時代のメトロポリタン美術館におけるデジタル戦略

アーロン・リオ

メトロポリタン美術館 日本美術担当学芸員、アメリカ



略歴

メトロポリタン美術館日本美術担当学芸員で中世近世絵画、特に水墨画の専門家。メトロポリタン美術館フェローであった2015年にコロンビア大学より博士号を取得。2015-2019年ミネアポリス美術館の日本・韓国美術担当学芸員として、日本絵画、汎アジアの仏教美術、現代日本工芸の展覧会を担当した。現在メトロポリタン美術館において、日本の近世における生と死へのさまざまな不安に対する芸術家の対応を探る展覧会を準備している。

発表内容

この10年間、メトロポリタン美術館は、全世界の鑑賞者がその膨大な収蔵品情報にデジタルでアクセスできるようこれまでにない努力をしてきた。2011年、同館は、所蔵するすべての美術品の学芸、保存修復、科学的調査結果等を含むデータの一部を公開した。その2年後、MetPublicationsを公開し、1870年の創立以来当館が出版した何百もの展覧会図録やその他書籍へのオンラインによるアクセスを提供してきた。2017年にはオープンアクセスポリシーを採用し、パブリックドメインにあるとされる美術品画像の無制限利用を可能にした。本発表では、これらアクセシビリティと情報共有に関する館の取り組みが実際どのように見えるものか、また、特に日本および広くアジアの美術に関する学芸業務への影響と、関連するプロジェクトが未だ収束しない世界的公衆衛生の危機にどのような影響を受けたかを検証する。

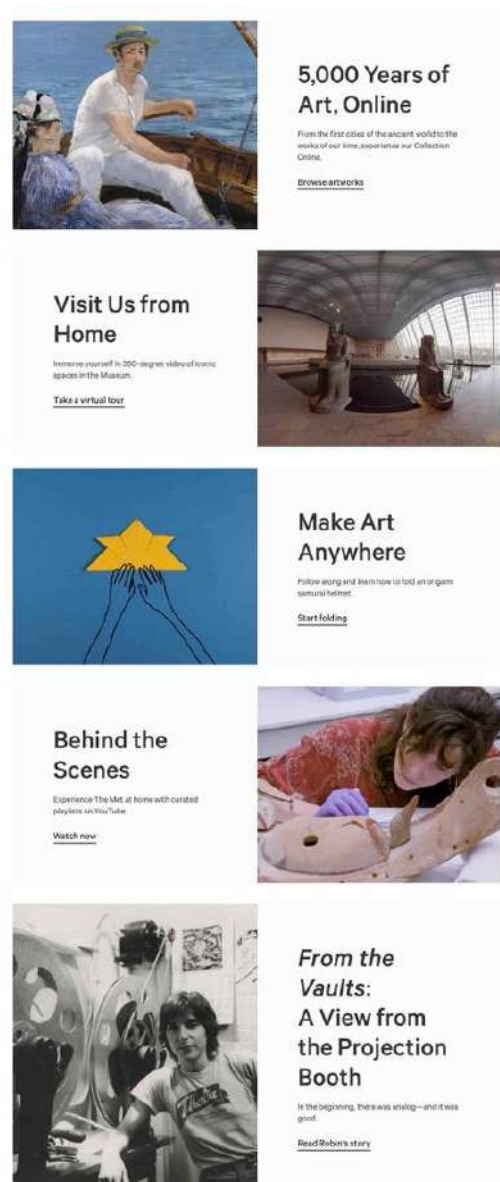
まず、コロナ時代に世界中の博物館が新規および既存の鑑賞者に情報を届けるために見出した様々な革新的な方法を概観する。世界の博物館は、ソーシャルメディアやオンライン学習プログ



2020年春に休館したメトロポリタン美術館

ラムから、ポッドキャストやオンライン・ライブ・イベントまで、デジタルコンテンツを追加・強化しようとしている。国際博物館会議（ICOM）の調査によると、昨年の春以降、3割以上の博物館がこのようなデジタルコンテンツを追加・拡充しており、これまでこの種のアウトリーチを優先していた博物館を上回る結果となっている。また、オンラインギャラリーツアーによって、世界の鑑賞者が、現在閉鎖中のギャラリーの設備や中止を余儀なくされた展覧会にアクセスできるようになった。一方、博物館では、コロナ時代に新たに適用された重要な長期的プロジェクトに再び注目が集まっている。例えば、SketchFabのようなオンラインプラットフォームを通じて、高解像度で完全に操作可能な3Dモデルを利用できるようにする取り組みなどが挙げられる。

昨春、メトロポリタン美術館はニューヨークが新型コロナウイルス危機の初期の震源地となった際に、閉鎖を余儀なくされた最初の美術館のひとつであった。メトロポリタン・オペラ、グッゲンハイム美術館、ニューヨーク近代美術館など、数多くのニューヨークの文化施設とともに、2020年3月13日に休館したメトロポリタン美術館が最初に行ったことのひとつが、ウェブサイト metmuseum.org のメインページの、わずかではあるが強力な変更であった。このウェブサイトには、気が遠くなるような数のデジタルコンテンツがあったが、新型コロナウイルス以前のウェブサイトでは、明らかに来館者の体験を補強するものと考えられていた。しかし休館後、#MetAnywhereと名付けられた再構築されたウェブサイトでは、既存のコンテンツに加えて新たなデジタルコンテンツのラインナップを用意し、鑑賞者がメトロポリタン美術館とその収蔵品に関わる様々な新しい方法を提供した。この新しいデジタル戦略は、以下の7つの点が強調された。①長年にわたって収蔵品のハイライトを紹介してきたウェブページに加え、美術館の収蔵品の中の200万点を超える作品に関するデータベースが、たとえばイスラム美術とアジア美術のように、収蔵品の部門横断的な特定の分野に焦点を当てる。データベースでは、ここ20年にわたり「ハイルブロン美術史年表」として知られている解説文や年表のコレクションを含む、子供や学生、大人向けの豊富な教育リソースも取り上げる。②Visit Us From Home：360度の球体技術を使って作成されたショートビデオ

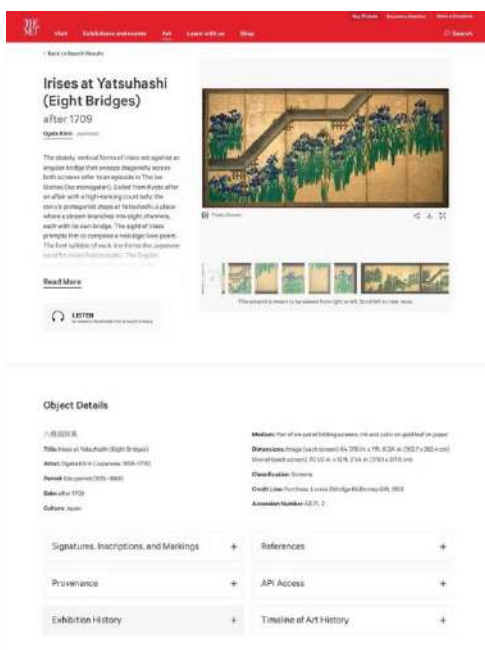


休館中のメトロポリタン美術館ウェブサイト上のデジタルコンテンツ

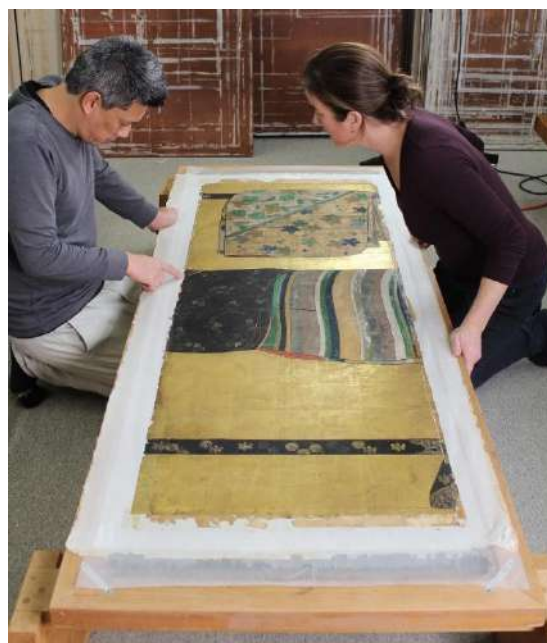
を YouTube で公開し、大ホールなどの美術館の代表的なスペースを探索することができる The Met 360 Project へと誘導。③Make Art Anywhere：子供とその保護者、教師のための様々な活動や学習リソースを提供する。④ウェブサイトの Behind the Scenes のページで、多数の厳選された動画や記事を掲載。⑤From the Vaults：1920年代までさかのぼるメトロポリタン美術館の映画アーカイブにデジタルアクセスできる。⑥Met Stories：学芸員、教師、芸術家、公人、美術館のスタッフなど、美術館を訪れる人々から集められた感動的なストーリーを共有する、1年間にわたるソーシャルメディアでの取り組みと動画シリーズ。⑦元々は2020年の150周年記念イベントに合わせて企画された展覧会 Making the Met に関連するコンテンツ：展覧会の概要、各展示室や主題の紹介、展示される300点近くの全作品のデジタル公開、展示室の案内や音声ガイドへのアクセス、展覧会のバーチャルツアー、写真と動画アーカイブを含む広範な資料が含まれる。

次に、作品に関する情報を提供するというメトロポリタン美術館の長年の取り組みと、過去20年間の進化したアプローチについて、以下の4つのポイントを含む点を概説した。①Heilbrunn Timeline of Art History の開設：数回の更新と拡張を経て、1000以上の解説文と7000以上の作品記録を含む参考・教育・研究資料。②学芸員、保存修復、科学的研究の成果を含む、メトロポリタン美術館所蔵のほぼ全ての作品についてのデータの漸次公開。③英語を母国語としない鑑賞者が利用できる部分の増強。④オープンアクセスポリシーの採用：パブリックドメインの作品の画像を、学術目的や商業目的で自由に使用できるようにした。

最後に、メトロポリタン美術館の収蔵品のオンライン展示を改善するために、学芸員、特に「日本美術」を担当する学芸員が行った様々な方法に注目した。それは、①収蔵品の画像の数と質の改良、②鑑賞者が画像を操作する方法の改善、③収蔵品データベースで利用できるデータの質と量の向上（書誌情報、技術・科学データ、一部のデータ群への日本語の追加など）である。



拡充された作品のページ。メトロポリタン美術館のオンライン収蔵品データベースにて



日本画の保存修復師 ジェニファー・ペリーと山崎雅信が、保存修復作業で「誰が袖図屏風」の一扇を調査する様子

トークセッション 3

アーロン・リオ

ローラ・アレン(サンフランシスコ・アジア美術館 学芸部長・日本美術担当学芸員、アメリカ)

ローラ・アレン (以下、L)：こんにちは。サンフランシスコ・アジア美術館のローラ・アレンです。リオさん、素晴らしい発表をありがとうございました。メトロポリタン美術館がこれまでに より徹底して取り組まれた、パンデミックの中での利用者との接触と関係強化のためのさまざまな試みを拝見し、勉強になりました。印象的であり、しかも、じつに魅力的な内容でした。これからじっくり、ご紹介いただいた動画やポッドキャスト、ツアーなど、さまざまなエクスペリエンス（経験・体験）を是非、もっと詳しく見てみたいですね。こうした取り組みは今では本当に 欠かせないものになっています。美術館も博物館も一般公開を休止し、リアルな来館が制限されているわけですから。きっと、こういったことが今後も重要になるのでしょう。今後、バーチャル体験によって美術館のリーチが国や国境を越えてどんどん広がっていくのですから。

お話の第二部では、メトロポリタン美術館のキュレーターチームが日本美術のオンラインコレクションデータベースを構築し、内容を充実させた素晴らしい成果をご紹介いただきました。ここでは主に、データベースプロジェクトについてお聞きします。

印象的だったのは、新しいデータベースのいくつかの機能です。なかでも、閲覧者に屏風や巻物を右から左に見せる機能がすごいと思いました。バーチャルな形式での日本美術コレクションの展示には、他にも特別な条件や課題などがあったのでしょうか？

アーロン・リオ (以下、A)：まず、閲覧者に実際にものを右から左に見てもらう取り組みについて説明します。これこそジョン・カーペンターがどうやらここ数年、言い続けていた経緯があったらしく、それが実を結んだのがちょうど、コロナ禍の時期になりました。ですがこれは、実に、実に大切なことなのです。当館ではすでに、たとえば、こうした屏風や対幅をすべて写真に撮り、オンラインで公開していました。ですが、そういった写真を左から右に見た人は必ず、構図が伝わらないといいます。カルーセル表示の画像では、左右で一對となった構図は絶対に伝わらないということです。これはそもそも、ジョンが漏らした不満でしかなかったと思うのですが、彼はこのことをしつこく言い張りました。彼と中国絵画の学芸員がとりわけ、そうでした。そしてとうとう、ウェブ開発者たちが昨年の秋にその声を聞き入れたものを作りました。

その他にもうひとつ、私が目下苦戦しているのは、日本語表記を入れるスペースを見つける機能です。当館のウェブサイトは、別称、つまりアーティストの名前の別表記や、データベースにあるそれ以外の項目の別表記を入れられるようになっておりません。そこで、ずっとそのスペースを探していたのです。そういう情報を入れられるオプションを何通りか考え、その情報が検索できるかを確認しました。これは当館ではこれまでずっと、とても重要なことでした。たしかに、

中国語表記または日本語表記がデータベースにあったら当館にとって有益です。ですがそれより、日本のサイト訪問者が漢字で「芦雪」と入れたら芦雪の画がそこに全表示されるようなサイト上のスペースにしたかったのです。私たちはついに、それができるスペースを見つけました。今は、コレクションにあるアーティストをすべてあたり、その名前に日本語表記を書き添える作業に取り組んでいる段階です。これももちろん、すごく大変な作業ですが。

このようなプロジェクトのほかにも、水面下ではまだまだたくさんの方が進んでいます。たとえばアーティストの別称、工房の名前、篆刻や印章、落款の読み方などは、当館のウェブサイトにはすべて載せているわけではありません。ですが、データベースには表示されていて、そうした名前のすべてに日本語表記や中国語表記も併記されつつあるので、もしかしたらそのうち、ウェブサイトでも公開されるようになるかもしれませんし、最低でも、そういったものも検索可能にもできるでしょう。そういうことに目下、取り組んでいます。

L:それは大変な作業ですね。アーティストの名前や作品タイトルを中国語や日本語文字で入力するだけでもかなりのご苦労かと思います。二番目の質問はこれよりもさらにハードルが高いもので、私自身が自分のところのコレクションのためにずっとあれこれ模索していたことについてです。リオさんは今後、箱書や鑑定書のような情報も、オンラインで表示するデータに追加しようとお考えですか？ また、将来的に背景情報や歴史的データなどについて他のサイトやデータ出典と相互リンクできるとお考えでしょうか？

A:箱書や鑑定書、その他の関連資料については、まさしく今、追加しようと当館で取り組んでいます。これは単に、収蔵品管理が目的です。美術品をコレクションに加える際、当館の保存修復師が手続きをするのですが、そのときにこういったものをすべて写真に撮ります。誰かがこうした写真をひとつひとつ実際に見て、ウェブサイトで公開するのに適切なもの、不適切なものを判断しなければなりません。ですが大体において、新規に取得した作品は、すべての画像が今ではウェブサイトで公開されています。

実際のところ、余計なものまで公開していることが多いです。ですから、私がいちいち担当者のところに行って、これは箱か何かに押しこまれていた古新聞の切れ端だから削除するように、と言わなければならないこともあります。ですが今のところ、ありとあらゆるもの、箱書も鑑定書も、ウェブサイトで公開されています。2015年に当館にバーク・コレクションが遺贈されたときも、担当者は何から何まで写真に撮りました。メアリー・バークの手書きのメモや、どこかの美術ディーラーからの、1970年代や80年代に彼女が購入したものについての手書きのメモもありました。こうしたものがすべて今、オンラインで公開されています。こうした写真は、収蔵品にまつわる18世紀の文書と同じ役割を果たしてくれるからです。

他のウェブサイトとの相互リンクについてですが、つい最近気づいたのですが、当館のウェブサイトの中ですら、リンクがちゃんと貼れていませんでした。アジア美術のコレクションマネジ

メントチームの責任者と話をしました。当初、私がイメージしたのは、ウェブチャットの中で特定の画について触れ、そのチャットの中に実際にそのハイパーリンクを埋めこむことでした。でも調べたら、当館のウェブサイトはそれができないことが分かりました。もしこうしたリンクを埋め込むと、当館のウェブサイトが崩れてしまうのです。その解決法はまだ見つかっていません。ですが、これまでサービス停止時間がずいぶんあったことも手伝って、その時間を使って、私はデータベースの開発に集中的に取り組めました。特に力を入れたのは、私たちが使うデータベースの特定の分野です。そこではコレクションの内外を問わず、関連する美術作品の記録ができるのです。

それを手がけながら、将来、その素材がオンラインで公開できればいいと願っていました。そのオブジェ、その絵画、その美術品に関連した他の美術館のウェブページがあったら、そこに直接リンクできたら便利でしょう。ですが、それが本当にできるのかどうかは私には分かりませんし、少なくともそれが今、実行できているとも思えません。私は、最新のテクノロジーに特に詳しいわけではありません。リンクというものは無効になるし、変更にもなります。ですからおそらく、こうしたハイパーリンクを常にアップデートするのは、とにかく延々と終わらない作業になるでしょう。Ukiyoe.orgのようなウェブサイトを考えてみれば分かります。これは素晴らしいリソースですが、使っているうちに、美術品の多くが相互リンクしているものの、そのリンク先の美術館やウェブサイトは無効になっていることに気づきます。これではあまり役に立ちません。

L: とても面白いお話です。おそらく、そういうテクノロジーは日進月歩で対応できるようになるのではないのでしょうか。これからどんどんいろいろなことができるようになるはずです。もうひとつ質問があります。リオさんがメトロポリタン美術館でのお仕事をスタートされたのは比較的最近ですが、もちろんその収蔵物については熟知されていますね。こだわりのある分野はありますか？ 担当したくて気になる、あるいは今後展示予定の分野とか、いま利用できるあり余るデジタルツールを前提に特によさそうだと思うものですか。

A: コレクションの中にこれまで集中的に取り組んでみた分野が、二、三あります。そのひとつはとりわけうまくいきました。最初に目をつけたのは、仏教コレクションでした。なぜなら、メトロポリタン美術館で私が最初に手がける展示会は仏教美術に関するもの予定ですし、とにかく日本仏教芸術の収蔵品にどっぷりのめりこみたかったからです。ですが、美術館が一時休館になり、私自身がコレクションや倉庫を実際に見に行けませんでした。そこで、視点を変えて着手したのが、整合性のとれた仏教美術の用語集を作ることでした。まだ作業中で終わっていないのですが、この用語集は、仏教美術を多言語的に捉えるようなものにしようとしています。どういう場面を想定しているのかというと、日本仏教芸術のことも仏教芸術のことも、もしかしたらそういう知識も何もない来館者が、たとえば東南アジア展示室に来て聖観音（しょうかんのん）の彫刻を見たときに、それが日本展示室にある観音や中国展示室にある観音（Guanyin）と同じ、または関連性のある神のような存在だと分かるようにしたいのです。こういったことをきっと、アジア美術館のみなさんもいつも、考えていたのではないのでしょうか。当館はまだそれを終わっていま

せん。さまざまな仏教コレクションを網羅した整合性のとれた用語集はまだないので、これにやりがいを感じています。ただし、今は一時中断のような感じになっています。

着任した当初——1年2か月前でももう、6回生まれ変わったくらい昔のことに思えますが、まだ、実際に一時休館になるほんの2、3週間くらい前のことです。そのとき私が取り組んでいたのは、これまで人の目に触れていなかったり、まったく調査されていなかったり、あるいは過去のある時点で誰かが低い評価をつけた絵画やコレクションの調査の土台作りのための研究や準備でした。そのときから、こういった収蔵品は展示も調査もされていなかったもので、最初はそういった収蔵品を引っ張り出し、写真に撮り、文書に記録し、オンラインでの公開を目指していました。もちろん、それがやっとならできるようになったのはごく最近、たまに出勤できようになってからです。これまで、当館にいる日本絵画が専門の上級保存修復師ジェニファー・ペリーと組んで作業し、主に掛軸ばかり数え切れないほどたくさん一緒に見ていきました。これらのものはこのときまで単に、写真にも撮られず、文書にも残されず、目録にも記録されずにいただけなのです。

今、私たちはこういったことを一つずつ進めているのですが、とてもやりがいがあります。私にとって、保存修復師と倉庫に足を運ぶことほど幸せなことはありません。保存修復師は私とは違う視点からものを見ていますから。そういう二人が知恵を集めて、目の前にある謎めいたものの正体を探り出しています。たいがいの場合、その収蔵品についての低い評価は正しかったです。70、80、100年前の判断ですが、なかには、看板に偽りなし、というものもいくつかありました。とにかく、こういったものがすべてオンラインで公開されます。いいものも悪いものも。これはたまたま面白く、重要な仕事だと思うのです。なので、今後もこうしたことにフォーカスしていきます。

L：まさしく、隠されたお宝に目を光らせておかないと。

A：そうですね、忘れ去られているだけかもしれませんから。

L：お宝の詰まった倉庫ですね。そろそろお時間になりました。あらためまして、発表をありがとうございました。今度はぜひ、リアルにお会いできるのを楽しみにしています。それも、数か月も先ではなく。ありがとうございました。

A：こちらこそ、楽しみにしています。